

バリ島で茶道



宮地 智子 (詩人)

国内旅行はもとより海外旅行は七年前にツアーでデンマークに行ったきりの出不精、旅行嫌いの私が、重い腰を上げたのは、娘が仕事でインドネシアに滞在しているからである。インドネシア語習得のため、現在、ジョグジャカルタにある、ガジャ・マダ大学の大学院に在籍しているのは外務省の研修生としての二年間の責務でもある。また、災害や事故などの時は、在インドネシア日本大使館員としても働かなければならぬ。

ればならないの言うまでもない。娘が日本を離れて一年も経たないうちに遭遇したあのジャワ島沖地震の際はどれ程心配したことが。震源地はまさに彼女の住んでいるジョグジャカルタのすぐ近くの海である。地震のニュースが一日、日本中を駆けめぐり、電話で娘と連絡が取れたのが夜遅くになってからであった。

とにかく一度行ってみよう、と思いついたのはいいが、私が持病を再発させてしまった。入院はせず、薬と自宅療養ということになった。少し軽くなった頃、では、ジャワ島の隣りのバリ島で、ゆっくりと静養するつもりで来れば、という娘からの提案で、私の二度目の海外旅行は実現したのである。

さて、Eメールで届いた、娘の持ってきたほしいものリストの中にあつた茶箱は、大事を取って手荷物として、リュックサックの中に入れた。これは昨年十二月に亡くなった私の母の形見である。裏千家独得の、持ち運べる茶道具は、若い女性に案外好まれる。娘が外務省に入省して一年目の国内での研修期間には、茶道や華道も選択科目として入っているの、これがきっかけで興味を持った娘の同期のお嬢さんも、娘と一緒に、生前の母の所に茶道を習いに通っていたことがあつた。

十月十二日の夜遅く、バリ島の Denpasar 空港に出迎えてくれた娘は少し太って元気そうだった。暑いといっても夜気は爽やかでホテルに向かう車窓の景色も、高層ビルなどひとつもな

く、南国の樹木が聳え立つ、何となく懐かしいような、親しみの持てる雰囲気があつてほつとした。ところどころに建っている巨大な像は、インドの叙事詩「マハーバータ」に出てくる英雄の像だと知つたのは後になつて、帰る時の車の運転手からの聞き齧りである。

ホテル・デイ・オベロイ・バリは葦葺き屋根の小屋が海辺に点在するリゾートホテルである。終日、波の音を聞きながら過ごした正味三日間は、身も心も洗われるような、まるで天国に紛れ込んだような至福のひとつときであつた。興奮して寝つかれないまま夜を明かした第一日の早朝、ベランダから続く砂浜を裸足で歩くと誰もいない海岸には視界いっぱいどこまでも果てしなくインド洋が広がつていて、その雄大さに声も出ない。水平線は何ものにも遮られることなくただひと筋にくっきりと線を書かせていて、波打際には純白の波頭が荒々しく寄せては砕け寄せては砕け散る。潮風は程よい湿り気を

帯びて肌に心地良い。太陽は背後から昇つて来るから、今日は海に沈む夕日を眺めるのが楽しみだ。青い空にはこれも純白の雲が湧き上がつて、どこまでも高く、海鳥さえ飛んでいない。陽が高くなるに従つて人の数が増える。

海辺の食卓では、パラソルの下、白人の老夫婦、親子連れなど、皆、言葉少なにも静かにゆつたりと時間をかけて食事をしていく。私達母娘もそのうちのひと組である。食事が終わつて小屋に戻る道すがら、プーゲンピリアやハイビスカスの赤い花や、カンボジャという名の匂いのきつい白い花、その他名前の知らない黄色い花などが咲き乱れていて、その木々の隙き間を小鳥が鳴き交わし、飛び交つている。

水面にうす紫や白い睡蓮の花を浮かべた小さな池には鯉が泳ぎ水辺には木賊が生え、菖蒲に似た剣のような葉が若草色に輝いている。小屋に戻ると窓を開け放して大きなベッドでゴロ寝をきめこむ。予定していたウブドでの伝統芸能鑑賞も中止して、専ら、まどろ

む。波の音を子守唄に、潮風に吹かれて。

さて、明日はジャワ島のジョグジャカルタにある娘の家に行くことになっている。初めての訪問なので娘が家を借りている大屋さんにご挨拶したり、ジャワ舞踊を教えに来て下さつていたり、トウティ先生にお会いして、そのレッスンを見学させて頂くことになっている。そこで、レッスンは終わったら先生にお茶を点でて差し上げましょう、ということになり、これも日本から持参した「茶箱の鑑賞と点前」という本を首つぴきで私は稽古を始めた。海に夕陽が沈む光景を眺める筈の時間を変更して、真赤に染まる夕焼けを背中を感じながら、私は月点前や雪点前を必死になつて練習した。汗がばたばたと落ちてくる。すっかり陽が落ちて暗くなつた頃、何とか目処がついた。案の定、ジャワ舞踊の名手で美しいトウティ先生は、日本から持参した茶箱を使つた私達母娘のもてなしをとて喜んで下さつた。

肥満の方は癌になりやすい？



杉本忠夫

（虎の門病院
内分泌代謝科嘱託医）

肥満は糖尿病をはじめ高血圧、高脂血症、最近話題になっているメタボリック・シンドロームなど種々の生活習慣病を誘発し、かつ進行悪化させます。そして、身体の生命線である血管の老化（動脈硬化）を早めます。

動脈硬化の進行は色々な重い疾患をきたすことはよく知られています。たとえば、大きな社会問題になっている認知症や半身不随の原因である脳梗塞をおこします。心臓では冠状動脈の狭窄・閉塞のため狭心症・心筋梗塞の発

作をおこし急性心不全や突然死を招きます。また、下肢の閉塞性動脈硬化症を発症して足の壊疽をきたし重症な場合には脚の切断にいたることとなります。

これらの疾患を予防するため、厚生省と日本糖尿病学会が共同で糖尿病発症予防などを目的とした一大プロジェクトが進められ肥満を防ごうとしています。

ところで、一般の方より糖尿病の方は、約一・七倍ほど癌に罹りやすいと

いわれております。では、糖尿病の方によくみられる肥満と癌の罹病率についてその関係はどのようになっているのでしょうか。気にかかるところです。そこで、今回この両者の関係を酒林の酒肴としてみたいと思います。

ところで、いろいろな調査研究によりますと、最近の二〇～三〇年の間で日本・欧米等の先進国、発展途上国においては諸国民の体重は増えているといわれています。特に発展途上国においては著明な体重増加が認められています。

それらの膨大な研究資料の中には、肥満または肥満傾向の方と標準体重の方とを比較して癌の発生率がどのようになっているかを調査研究した貴重なデータが含まれております。そこで、その報告をみてみましょう。たとえば、結腸（大腸）癌の罹病率については、肥満・肥満傾向の方は標準体重の方より、女性では約一・五倍で男性はさらにその比率は高く一・八倍くらい罹りやすいと報告されております。

また、女性の子宮癌の発生率をみてみますと肥満女性では二から四倍も高いとびつくりするようなデータの報告がされています。

また、閉経後の女性が乳癌に罹る率でも肥満女性では約一・三から一・五倍ほど高率に発症するといわれています。

ところで、頻度の非常に少ない腎臓癌ではどうでしょうか。腎臓癌においてもやはり肥満者は約一・六倍から一・八倍ほど罹りやすいと述べられております。

日本では圧倒的に頻度の高い食道癌や胃癌はどのようになっているのでしょうか。やはり肥満者の方が二倍以上も食道・胃癌に罹りやすいと判明しております。

どつしてこのように肥満の方が癌になりやすいのでしょうか。心配なことです。ところが、残念なことですがいまだに確かな病因については解明されておりません。しかし、いくつかの病因が考えられています。

まず、肥満者と糖尿病の研究で肥満者の体内ではインスリンというホルモンが増加していることが明らかにされております。

インスリンは主に体内で血糖の調節を行っております。また体内のタンパク合成を調節促進し細胞の成長を促しています。そのためインスリンは一種の成長因子と呼ばれ一時は癌の発育に關与し助長しているのではないかといわれたことがあります。

したがって、肥満者では体内でのインスリンの過剰が長期間続きその間に何らかの成長因子様作用をして細胞を癌化させているのではないかと推測されております。

ところで、このインスリンは約一九二三年より約八三年間注射薬として血糖コントロールのために糖尿病の治療に広く世界中で使われ多くの方々の生命を救っています。

そこで、インスリンの発癌作用が疑われた時期に、癌を患っている糖尿病の方の治療にインスリン治療を行うと

癌が増殖しやすくなる可能性を懸念されたことがあり、インスリン注射による治療を控え、血糖降下剤の内服治療を優先した一時期がありました。

ただし、現在治療に使われるインスリン量では癌の発症および発育には臨床的には影響はないと考えられております。

ところで、女性の敵である乳癌および子宮癌については次のように考えられています。女性では肥満に伴つインスリンの増加により、乳癌および子宮癌の発症を高めるといわれているエストロゲンとよばれる女性ホルモンの分解が遅く、そのためにエストロゲンが体内に増えることがその要因ではないかと考えられております。

このようにみてきますと肥満は生活習慣病を誘発し、さらに癌の発症率を高めることになり人々の健康に極めて大きな問題を引き起こすことになっているようです。

身体をスマートに保ち生活習慣病と癌から身を守りましょう。

節分草

中西美子



私には、いくつかのお気に入り花屋さんがあります。なかでも新宿の小田急線構内にある花屋さんには通る度に寄ります。山野草があるからです。なんとも可憐でつつい欲しくなり買つて帰るわけですが育てるのは、かなり難しいのです。たいていは、夏の蒸し暑さに負けるかほかの強い草に負けて消えてしまいます。それでも懲りずに挑戦しています。

節分草もそのひとつです。ちょうど節分の頃咲く花なのでこの名前がついたようです。でもこれは、黄色のヨーロッパ原産のものでした。日本原産の節分草は、透き通るような白い花弁におしべの先のやくの紺紫色の対比が、類のないすばらしさだそうです。今度こそ見つけたら、即GETします。

古本と怪奇譚と大衆文学



志村有弘
(相模女子大学教授)

ここ十年ほど、「図書新聞」で同人雑誌評を行っている。同人誌は同人たちが身銭を切って発行する仲間雑誌であるが、小説や詩歌は無論のこと、その他に思いがけない貴重な文学・歴史資料に出会うことが少なくない。作品を読むのはシンドイ作業であるが、私が長いこと同人雑誌評を続けているのは、こうした資料や文学的感動に出会えるからである。

最近読んだ同人誌「行路一六〇」で田崎勝子が「高橋たか子はなぜキリスト者となったか」(行路一六〇)の冒頭

で「最近本屋に立ち寄ることが少なくなった。自分に残された読書量を量るからである」と書いている。私もこの言葉に納得する。私自身も新刊屋に入ることは少なくなった。新刊屋に入るのは、打合わせなどの時間にはまだ間があったり、非常勤講師として出講している学校へ行く途中、時間潰しに立ち寄るくらいである。

だが、古本屋や古書即売展には通い続けている。以前、詩人の林富士馬から「文学が好きで生きていた」という手紙を買ったことがある。この言葉を

借りれば、私などはさしずめ「古本が好きで生きていた」ということになるうか。

私の場合、当分の資料というだけでなく、いずれ使うことになる資料という目的で購入するのだが、無論、これらの本の大半は空しく積読本に終わる可能性がある。このように考えてみると、人間とはなんとも業の深い存在であることが。

三つ子の魂百まで、という諺がある。

私は中学・高校生のころ、枕元に大衆文学の倶楽部雑誌を積み上げて読み耽っていた。それらの雑誌は親が処分したらしく、なくなってしまっていたが、今、私はそうした昭和二十年、三十年代の倶楽部雑誌を古書展などで見つけると購入している。以前、春陽堂で怪奇伝奇時代小説選集十五巻・捕物時代小説選集八巻を編纂したが、このアンソロジーの根幹は倶楽部雑誌掲載の作品群であった。考えてみると、この仕事はかつて読み耽った倶楽部雑誌を忘れたかねてのことであったように思う。

怪奇・伝奇という言葉が表わしているように、私は昔からおどろおどろしい怪奇譚が好きであった。戦国時代の覇者織田信長にしても、彼にまつわる怨霊伝説が伝えられている。信長は「人間五十年、下天のうちをくらぶれば、夢幻の如くなり……」という歌を好んでいたというが、五十歳に満たぬ四十九歳でこの世を去った。本能寺の変は、彼が理想とした天下布武の完成を目前にした事件であった。

本能寺に宿泊していた信長は、外での騒動の声を聞いて、初めは下々の者たちの争いかと思っていたが、明智光秀の謀反と聞いて「是非に及ばず」(やむを得ない)とつぶやいたという。「是非に及ばず」と言うものの、信長としては無念であったに相違ない。常識で考えても、信長の霊は浮かばれない。信長の築いた安土城跡には信長の怨霊伝説にも似た話が伝えられるのも当然である。

私は、信長を倒した光秀にも強い関心を抱いて、資料を集めたり、史跡を

探訪したりしている。反逆者 光秀として、言い分はあつたはずだ。居城のあつた亀岡では、町を繁栄させた名君として今なお崇敬されている。私が光秀に関心を抱くのは、彼の言い分とは別に、日本史の中でずっと反逆者の烙印を押し続けられてきたからである。

反逆者といえば、寛永十四年(一六三七)に勃発した島原の乱は、一揆の徒三万七千人が全滅した。もともとただ一人、山田右衛門作という絵師が「自分には心ならずも一揆に荷担させられた」という意の矢文を幕府軍に射込んで助かっている。もともとこの地方の農民たちは苛政による貧困から一揆の狼煙を上げたものだ。結果は、前述のように全滅した。これでは一揆の徒は浮かばれない。島原の人が「一揆の盟主天草四郎の像で怪我をしたり、原城では、夜中、農民の走る姿を見ることがあるそうです」と語ってくれたことを思い出す。

以前、島原の乱関係の資料を点検したことがある。右衛門作が書き残した

記録以外は全て幕府側が書いたものであり、だから当然、農民たちは「一揆の徒」とか「賊」という表現をされている。

歴史書は、勝者が書き残すものである。敗者、特に戦乱や抗争で敗死した者は、弁明の余地がないし、何かを書き残すこともできない。それが怨霊となるのである。平将門・崇徳天皇・藤原頼長・護良親王など、全て文学や歴史の中では怨霊となった人として登場する。歴史の世界には陽の当たらない人、いわゆる歴史の闇の世界に存在する怨霊たちである。私は、こうした陰の部分、闇の世界に心魅かれるものがある。

自分の過去半生を振り返ってみると、大衆文学、倶楽部雑誌、怪奇譚、魔界、歴史の闇の世界……私はこういう方面に関心を抱く性癖があるようだ。考えてみると、私がふだん勉強している説話文学や『平家物語』も大衆文学に相違ないのである。

「ムスピミタマ 産霊の御霊」



志村 栄守
(評論家)

ともかく最近、SFとか異常犯罪を強調した映画が、外国映画を席卷しているようで、普通の映画を見たいと思っている者はすこぶる困惑する。娯楽の一つが消えてしまったような気がするくらいだ。

だからついつい、一つの映画に懐古の情がいやがつえにも募ることになる。人間ドoramaとは「ういつことだ」と言っているようなあのラストは何度見てもいい。

名優扮する初老の主人公二人が、商務長官（J・ウッズ）の別邸で三十五年振りに再会する。この時、長官は今や遠い日の出来事となった仲間達へ

の裏切りを告白するが、その際、こんなやりとりがある。「実はあれには組織のアト押しがあった」。すると、真の主人公（R・デニーロ）は、かつての友を射るような眼で見据えたあと、こう言う、「ユート・クレージー」。これに対し長官は、間髪を入れずこう返す、「オマエは遠いあの日にも、そう言った！あの瞬間、オレの心は固まった」。若く、お互いが輝きともにもあった三十数年前、言葉のアヤから真の主人公は同じ文句を友に投げたが、その当時、仲間を裏切るべきか逡巡していた長官の心は、あの瞬間に決行へと固まったというわけだ。これを俗に引き金、

同じ意味でトリガーとも言うようだ。で、話は途端にこの現実へと戻る。するとそこには、ニュースの時間帯におさまり切らないほどの怪事件の頻発という日々がある。当然のこと、この世のことにはすべて相応の原因とが理由が隠れている。とは容易に想像の範囲だが。

だからマスコミも、事件を報じる際には、その背景、あるいは引き金となったものとは何か？のような面から伝えようとする。大多数の視聴者の納得の仕方に迎合するのは当たり前と言えはそこの通りだ。だからそれはそれで大いにけっこうなのだが……。その先と言うか、それ以外と言うか、その辺りを問う人は誠に少ないようだ。

小林秀雄壮年期の作品に『思想と実生活』というのがある。作家との論争を、全集に載せたということらしい。

「正宗氏は、トルストイの家出の直接な原因は細君のヒステリイであった事を極力主張する。ではヒステリイの原因は何であったか。彼女は子宮内膜炎

を患ってゐたかどうか文献によつて調べるがよろしい。直接原因などといふ言葉は元來便宜上の言葉に過ぎぬ。(後略)。「言葉が先輩作家に対して矯激と映らなくもないが、他の著作ではこの作家への敬愛の念が滲み出ていることを加えておく。

自信が文章の隅々にまで漲つているのが見え、抱くその思想への全幅の信頼が揺るぎないことを物語っているかのようだ。それはともかく、なぜ、小林は「直接原因」をこんな風に扱つたか？最初にこの文章に出会つた時の印象は、そんなものだったと思う。

映画・ドラマという人間の作為的娯楽においては、当然、引き金とか「直接原因」は劇的な効果を發揮する。また、現実の社会でも事件報道などではかなりの部分を占める。これは自然の流れ……のように見える。いや、実にその通りなのだが。

ちなみに先刻の文章の後半はこうなる。「細君のヒステリーなどはどうでもい

いのだ。どうでもいいという意味は、思想の方は掛け替へのないものだが、ヒステリーの方は何でも交換できるものだといふ意味だ。」

しかし、これでも判然とするわけではない。ところが私達は、ありがたいことに小林の全著作をこの位置から俯瞰できる。小林が刻んだ時間を勝手に行き来もできる。そんな恩恵に浴しつつ、時の流れとともに歩むと、諸々が見えてくるものだ。

そんな前置きめいたことを書いて、後年の小林『本居宣長補記』を見ると、晩年の著作ということが念頭にあるからか、抱くその思想が歴然と見えもする。少くとも思想の側面が白日の下に晒されている感じがする。

「世に諸の物類も事業も成るは、みな此ノ神の産靈の御靈による。これは今日も変りはない。ここに宣長の思想の根幹をなす止む事のない萬事の生成という觀念がある。(ルビ=原文の通り)。

現代社会ではまことに唐突と言つし

かないが、小林の文章の外観がどれほど多彩かつ多岐にわたると見えたとしても、その根柢にはこの思想があることに思いを馳せるのは、無駄ではないようだ。

「宣長の思想」の文字も見えるが、そこへ寄せる信頼とか尊敬の念が肌伝いに伝わるわけで、小林本人のそれと寸分も変わることはないだろう。

それにしても、たたいまの世の中は、技術の進歩、あるいは財形のような外側にのみ目が行く時代のようにないか。その対極ということには、まるで関心とか顧慮を配しないかに見えるではないか。

古の人におおらかさとか純朴さは見ても、それ以外には関知せず、彼等に対して己の優位性という虚像を構築しているのが現代人ではなからうか。ところが小林が引いた一節「世の諸の物類も事業も成るは」、「みな此ノ神の産靈の御靈」という思想の本質は、鋭くかつ叡智に満ちてはいないだろうか。

腕振りはやや控え目に



桐原良光

(文芸評論家)

高齢者の救急搬送で、圧倒的に多いのが室内での転倒事故だという。パリアフリーの時代になっても、ちょっとした畳の縁や絨毯の端、あるいは布団の縁などに突っ掛かって転倒するというケースが少なくないらしい。たかが転倒と思っではいけない。転倒事故で骨折して、そのまま長期に寝付いてしまつことが少なくないのだ。高齢者が一度寝付くと、元へ戻るの容易なこ

とではない。昔の家なら段差だらけだったろうから、それなりに注意して、足をしっかりと上げて歩いたことだろうが、現在なまじパリアフリーだと思ひ込んでしまつてゐるから、注意力が散漫になっているということもあるのだろう。

「高齢者」に半分足を突っ込んでゐるほくは、相当大股の速足で歩いてゐるつもりだが、そのほくをさらに大股

で追い抜いていく若い大柄な女性がいりたりするから、がっかりしてしまう。思わず見事な腰つきに見とれてしまうのだが、それ以上注目していると怪しまれかねないので、視線を遠くへ回したりする。そのほくが、コンクリート舗装の道で靴先を引っ掛けて、思わずヨロけそうになり、忌々しげに道路を睨み付けると、僅かな出っ張りに引っ掛かつていたことが分かる。爪先がしっかりと上がっていなかつたのだらう。そんなことがやはり多くなつてきたような気がする。自分では足をしっかりと上げて歩いてゐるつもりでも、実は舗装上ストレスに足を運んでゐるのだらう。

そんな目で休日の夕方や夜間に自宅近くを歩いている人たちを眺めていると面白い。中年以上の夫婦と思われ二人連れや、かなりのオバサンの集団が、本当に一生懸命という感じで歩いている。トレーニングウェアなどに身を包み、足元はもちろんスニーカー。首元には一様にタオルを巻いている。

彼らが、手を高く大きく振りながら速足で歩いているのは、一種異様な光景でもある。これが健康志向というものがな、と思う。多分、これは健康維持に役立つのだろう。転倒防止にも効果があるのだろうと思う。

○六年七月三十一日に七十九歳で亡くなった作家、吉村昭さんに言われたことがある。やはりぼくも健康を考えて、手をしっかりと振って歩いていくことがあり、何かの話のついでにそんなことを作家に伝えたのだと思う。作家は笑いながらこう言った。

「桐原さんね、あまり高く手を振り上げて威勢よく歩かない方がいいよ。ムシヨ帰りの人と間違えられるから」

吉村さんは、『戦艦武蔵』などの戦記ものはじめ、『生麦事件』など史実に基づいた多くの名作を残したが、『破獄』『仮釈放』などの刑務所ものでも我々を大いに楽しませてくれた。大学時代に学内同人誌の編集に携わり、費用が安くて済む刑務所に制作を依頼したために校閲作業などでは必ず刑務所へ詰

めた経験があり、厳しい経験をする収容者にも作家の目が向けられるようになったらしい。その吉村さんの経験から、刑務所で高く手を振って集団歩行する訓練を経験した人は、シャバに出てその習慣がなかなか抜けない、ということを知っていたのだ。

その話を聞いてから、ぼくの手が穩やかに振られるようになったことは言うまでもない。しかし「健康」第一に考えたら、どちらがいいかは分からな。だから、近所で高く手を振って歩く人がいても、止めた方がいいよ、とは思わない。こっそりと吉村さんの話を思い出しているだけだ。

それにしても現代の平均的な日本人は、ここ二、三年の間で急速に脚力が衰えたのではないかという思いがある。昔の人は、どこへ出掛けるのもよく歩いた。小説の中の男も女も実によく歩いていたと思う。四、五十年前なら東京二十三区内でも結構砂利道があったが、その道を年寄りでも子供でもほとんど歩いていた。年寄りだって転ん

だところなど見たこともなかった。砂利道で慎重に足を運んでいたのだから、腰の曲がった年寄りも坂道を上り下りしていた。やはり車の普及が、脚力を奪ってしまったということはあるのだろう。そしてこれからもその傾向は進みこそすれ決して後戻りはしないだろう。子供たちが、歩きながらゲームをしている時代だ。脚力の衰えはますます進むだろうと思う。

そこで、転倒防止のための訓練となる。高齢者になつてからでは遅過ぎると思うが、若い時には将来の深刻さまでは恐らく考えられないだろう。結局は、中年世代以降が、一所懸命に歩き回ることになる。「転倒防止教室」なるものもあるらしいが、金がモツタイナイという人は歩くのが一番だろう。顎を引いて、姿勢を正して、かなりの大股で、爪先を意識的に上げて、腕をしっかりと振って歩くことが肝要らしい。ぼくも一所懸命に爪先を上げて歩くと思う。でもぼくの場合は、腕の振りには少々控え目におこうと思う。

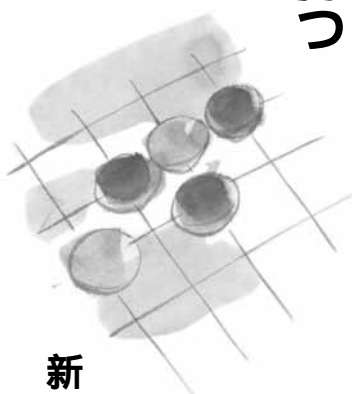
レンタルビデオ

佐川 毅彦



私はホラー映画が好きで、レンタルビデオ店によく行く。かなりの数のホラーを見てきた。タイトルの知られていないビデオなどを借りて後悔する事が多い。マスコミで宣伝している映画でもつまらん物がたくさんある。それなのにはげしく、おそろしいパツケージを見て、これは当たりだと期待して借りてしまえばあまりのひどさに腹が立つ。まさに借りるアホウとはワシの事。そんなビデオを借りようとするバカがいたら、君これは実にくだらんから見ないほうが良い」と助言してやろうと店でまぢかまえようと思つたが、思いなおしてヒゲイ者がふえるのを願つて知らんぷりする。最近DVDがかなりできてレンタルビデオの安売りをする店がでてきた。家からすこし離れている店だが、なんと一本一〇〇円で売られている。画像のうつりも悪くない。行くたびに二本、三本と買つて三十本ぐらいになつたが、今のところ残しておこうと思つているのは二本だけである。掘り出し物が出ないかとレンタル店へ行くのである。私が欲しいのは古いホラーで、八マープロとか、新東宝や化猫映画なのだが、どの店でも見つけた事がない。

囲碁を打つ



新田啓造

(ジャーナリスト)

月に一度、東京四谷の碁会所で碁を打っている。相手は高校時代の仲間である。それぞれ一線を退いて、暇をもてあましているわけではないが気軽な身、いそいそとやってくる。

夕方から、荒木町の小料理屋で月一回の同窓会という名の飲み会。それまでのつなぎの碁でもある。

この月一度の同窓会、家族や周囲からは、奇異な目で見られている。第一金曜日がその日。すでに二百数十回を数えている。その回数を律儀にしっかりとメモしている仲間もいる。囲碁を打

つようになったのは一、三年前から。

実力のほどは知れているが、下手は下手なりに面白い。一手打つことに盤上が変化する。勝ち負けもさることながら、その変化を楽しむ気持ちのほうが強く、つい無謀と思われる方向に打ってしまう。

これがまた相手によって、またその日の気分によって異なるから始末が悪い。普段はいたって温厚な人が、妙に戦闘的になったり、かと思えば極端に控え目になったりする。しかし、全局的にみれば、その人の性格は隠しよう

もなく出てしまう。

囲碁を打ちはじめたのは五年前。還暦を過ぎて、子供の頃を思い出し久し振りに打つてみようと思ったのだ。

加入している健保の囲碁大会に出してみた。事情がわからないまま初段で出場し、運よく全勝してしまった。次の年は二段で出場。連続して全勝し優秀賞の楯をもらった。

三年目は三段で登録され、残念ながら三勝一敗。こんなところが実力かと思われる。いま月に一度打っている仲間も、一応二人とも棋院の三段の免状を持っている。似たり寄ったりで、いところなのかもしれない。

囲碁を憶えたのは、小学校五、六年生の頃かと思う。親父が家で親戚のおじさんや職場の仲間と打っているのを横からのぞいて憶えてしまった。そろって段にはほど遠い一、三級くらいだったと思う。親父と初めて打ったとき勝ってしまった。

親父はそのとき何も言わず、「もう一盤打つか」と声をかけ、続けて打った。

二度目も勝ってしまった。親父は何も言わなかった。

以来、親父と打つこともなく、親戚のおじさんとは何局か打った記憶があるが、それきり碁とは無縁になった。

NHKの日曜囲碁対局を観たり、新聞や雑誌の詰碁を見たりする程度で、打つことはなかった。そのうち機会があったら打つてみたいとは、心のどこかで思っていた。

囲碁にまつわることと言えば、三回目に那智を訪れた時、思いきって碁石を買ったこと。那智黒の黒石と、日向の蛤から作った白石。肉厚の感触が何とも言えなかった。

しかし、その石を使って打った記憶がない。独りで、並べてみたりしたことはあったが、相手と打ったことがないのだ。いまでも埃をかぶって押入れの隅に眠ったままである。

いまさら強くなるうとは思わない。打っている瞬間瞬間を楽しめれば、それで充分。現実にはなかなか冒険はできないが盤上では何でもできる。

死の危機から生還できることもあれば、八方ふさがりで討死することも珍しくない。あがいても駄目なときは駄目で、戦線を拡大しようが、早目に店終いしたふりをして、景色は一向によくならない。

それが、一手打つことに一喜一憂できるところが、素人碁の楽しさ。

読みきって打つ打ち方もあれば、読みきれずに打つ打ち方もないわけではない。こつちの方が面白そうと軽い気持ちで打つ。相手も乗ってくる。

こうなると盤上は、目まぐるしく変化する。読みきっての打ち方は、面白みに欠けるような気がする。

囲碁は勝ち負けのゲームであるが、余りに勝ち負けにこだわると、つまらなく思うのは私だけだろうか。また、勝ち負けにこだわると勝てないのが囲碁である。奥が深いというか、無限の世界が、そこにある。

下手は下手なり、無い頭を絞って考える。これはアルツハイマーの予防に役立つという。勝ち負けにこだわって

頭に血が昇るとどうなんだろうか。

ま、いい面もあれば、悪い面もあるということか。

月一というのは、すぐやってくる。

碁を打つのが楽しみなのか、その後の飲み会が楽しみなのか判然としないが第一金曜日は赤丸となっている。

昔の棋譜を並べるのも悪くはないが碁はやはり相手がいた方が楽しい。気心の知れた仲間と打つことは、更には楽しい。世俗から離れた盤上で、いろんな絵が描ける。思いがけない展開になることも、ままある。

確かに疲れる。しかし、その後の酒が疲れを癒してくれる。気がかりな棋譜が頭にこびりつくこともあるが、酒がすべてを忘れさせてくれる。

一日千円という碁会所の場所代も有難い。お茶まで出してくれる。まさに都会のオアシスである。

実力のほどは二三年前と比べ上がっているとは思えないが、そのことには執着しない。月に一度、仲間と碁が打てれば嬉しいのである。

ウクライナにおける日本月間での展覧会

さかもと ふさ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)



ウクライナにおいて、今年の九月、十一月の三ヶ月間、二国間で日本月間が行われ、そのイベントの一环として、「さかもと ふさ 日本の型絵染版画芸術・形と色」展が、ウクライナの首都キエフのハネンコ美術館において開催され、期間は十月十一～二十九日まで行われた。展覧会は盛況のうちに終わり、期間中の来場者は約三〇〇〇人、美術館始まって以来のメディアの取材があった。また、現代版画での展覧会はウクライナでは初めてで、人々は非常に興味をいだき、題材となった日本の伝統ある風景や祭りの作品、さらに型絵染版画の複雑な工程にも高い関心を寄せてくれた。ウクライナの人々にとって、日本の伝統技法を用いた現代版画であるということも大変面白く、興味深いものであったようだ。

チエリノブイリから二十年が経ち、街には建設中のビルがたくさん見かけられ、十月も終わりに近づくと緑豊かなキエフの街は時を刻むように色づいていった。

桜色の話題



永岡 慶之助 (作家)

あえて明るい話題を拾いたいと思う。
「あえて」というのは、近来、あまりにも殺伐とした事件が続き過ぎるからである。例の「二条河原落書」の、
「此頃都二ハヤル物
夜討、強盗、謀論言……」

の文句じゃないが、「親殺し、子殺し、いじめ自殺」おまけに「核実験」ときては、こちらの気分もいささか黒色や灰色にもなるというものだ。止むなく
「憂きも一時、嬉しさも
思い覚めれば、夢候よ」

と悟りすまそうと思っても、凡人の身にはなかなか心は晴れない。
そんな折も折り、ふと気分をなごませてくれたのは、大阪市の難波宮跡から、七世紀中ごろと思われる、日本最古の万葉仮名文の書かれた、木簡が出土したというニュースであった。その問題の木簡は、長さ一八、五センチ、幅約二・六五センチ、厚さ五、六、五ミリ、丁寧に削られた片面に、「皮留久佐乃皮期米之刀期」と墨で十一文字が書かれてあり、十二文字はわずかに残して、下部は欠落しているとのことだ。
国語学の専門家によると、「はるくさ(春草)のはじめのとし」と読む可能性が高い、なかなか煩重な言い廻しは当然であるうが、門外漢の私などは、素直によるこんで、うる覚えの万葉歌を
「岩走る垂水の
上の早蕨の 萌えつる
春になりけるかも」
と勝手に連想し、久しぶりに良い気

分になっている仕末である。実際、「はるくさの はじめのとし」

口誦してみると、次第にほのぼのとした春先の気分になるから不思議であり、幸せなものだ。これはもう万葉仮名のもつ功德というものか。

ところで、万葉仮名文の出土から連想されるのは、西暦二〇〇〇年とキリの良い年になった夏、東京都葛飾区芝又 つまり映画「男はつらいよ」の舞台となった芝又の古い戸籍に、思いもよらぬ男女の名が記載されていた、というのも心暖まるニュースであった。

古い戸籍といつても、並みの古さではない。それこそ古い、古いといってもなお、言葉が足りぬ古さである。というのは、葛飾区の文化財担当の学芸員たちが、区内にある博物館の目玉として、奈良、東大寺の正倉院に伝わる戸籍のレプリカを作成するため、古い戸籍を調べたのが、

「下総国葛飾郡大島郷戸籍」

なのだ。すなわち、奈良時代の戸籍なのである。日本に初めて国、郡、里

が置かれたころの戸籍は、奈良時代の七二一年頃に記されたと考えられるから、およそ千三百年もの気の遠くなるような昔、昔のこととなる。

学芸員たちが、思わず「おっ」と驚きの声を放ったのは、その養老五年（七二一）の古い戸籍に、なんと「孔王部あなほへのとら刀良とら」なる男性の名と、「孔王部あなほへのとら佐久良さくら売め」なる女性のを発見したからだ。

新聞の見出しも、「寅さんとさくら奈良時代にもいた？」、「おいちゃん、そりや本当かい？」と大活字だったが、ほんと、あまりにデキスギの感があつて、笑い出したいほどである。「孔王部あなほへのとらは「穴穂部あなほへのとら」とも書き、穴穂部皇子（安康天皇）のため置かれた部で、五世紀に天皇や皇子のため部を置いた時には、数ヶ村を一括して部とすることが多かったといわれるが、芝又のある葛飾郡大島郷には、孔王部を氏とする五百四十五人が記載されていたとある。

「映画の寅さん、さくらさんより千年以上も前に、とらとさくらが柴又に暮らしていたなんて、ちょっといいです

よね」

とは、発見した学芸員氏の感懐。

また、発掘のつづけられた柴又八幡社古墳から、埴輪の顔がほぼ完全な状態で見つかった際、同氏は思わず呟いている。

「この埴輪、きつと古代のさくらさんですよ。寅さんも見つからないかなあ」昭和四四年に始まった映画「男はつらいよ」によつて、柴又帝釈天の名は日本中に知られるようになり、門前町の商店街は連日観光客で賑わっているようだが、私が訪れたころは、まだ帝釈天境内も門前町もひなびて閑散としていた。

帝釈天近い、かつて映画「人生劇場」の舞台ともなった川魚の料亭で、評論家M氏の出版記念会を、親しい仲間だけで催したのだ。もう記憶もおぼろになったが、江戸川から引かれた池の水面に、灯火がゆらめいていたのを妙に鮮明に覚えていて。以上が、殺伐たる世に、せめてもの、ちよっぴり明るい桜色の話題ということか。